

## 新聞小説の西／東

― 漱石の西／東 ―

諸 岡 知 徳

キーワード…新聞小説、菊池幽芳、「己が罪」、家庭小説

### 一、漱石の想像力

一九一（明治四四）年七月二六日、関東地方に襲来した暴風雨のために、高輪で鉄道線路が壊れ、下り列車が不通になった。その後、八月の初旬まで雨は断続的に降り続き、天竜川が決壊、東海道線は不通になった。関西での講演旅行のために、八月一〇日に東京を出発する予定だった夏目漱石も、一日まで汽車の開通を待たねばならなかった。このとき、東海道線の再開をまっていたのは漱石だけではなかった。漱石の「手紙」の原稿も東海道線不通の影響をこうむって、足止めされていたようだ。

「手紙」は『東京朝日新聞』の七月二五日から三一日にかけて掲載され、ついで八月一五日から二一日にかけて『大阪朝日新聞』に掲載された。「手紙」の前には「ケーベル先生」と「変な音」とが掲載されていた。<sup>①</sup>これらの小品は、関西での漱石の講演会の宣伝を兼ねて掲載されていたのだろう。おそらく、これらの原稿は汽車便

で『大阪朝日』に郵送されていたと考えられる。暴風雨前の「ケーベル先生」と「変な音」には『東京朝日』と『大阪朝日』の掲載日には二日ほどしか差がないが、「手紙」では掲載日に二〇日ほどの開きがある。汽車の不通がそうした時間の差を拡大したのだろう。漱石の作品の掲載日のうち、「手紙」の場合ほど大きなずれがあることはむしろ珍しいことだった。漱石の作品の多くが同じ日付の東西『朝日新聞』紙面に掲載されていたことは、全集の後記と校異などからもわかるだろう。それらは意識的に同時に漱石の作品を掲載しようとしていた東西『朝日新聞』の方針を示している。本来は存在していたはずの東京と大阪、東と西の距離は漱石の作品においては無意識化されていたのだといえよう。「手紙」は東西『朝日新聞』の距離を露呈してしまった、稀有な例外なのである。この例外はさまざまな問題を示唆してくれる。

漱石は一九一〇年代の新聞小説において特殊な作家である。漱石は東西『朝日新聞』に小説が同時掲載されていた唯一の作家だった。

だが、そうした特殊性は十分に意識されてはいない。ここでの特殊性とは単に漱石を偉大な作家として言祝ぐものではないし、漱石の権力性を非難するものでもない。漱石の特殊性とは、新聞小説という発表形態での特殊性である。それは読者と新聞という視座を必要とするだろう。漱石の特殊さとはコンテクストとしての新聞とテクストとしての文学とが交差した地点で提起されるものだからである。一九〇七（明治四〇）年、漱石は新聞小説という発表形態を媒体として選択した。また、東西『朝日新聞』は漱石の作品だけを東西同時掲載しはじめる。漱石の特殊性はそこに端を発する。

新聞と近代の文学とが「想像の共同体」に強い関連を持つことに關しては、すでにベネディクト・アンダーソンの指摘がある<sup>(2)</sup>。同じ空間と時間を共有しているという共時性と、それが毎日更新されていくという時間の連続性とは「想像の共同体」を想像することを可能にする。アンダーソンは、新聞を毎日多数の読者に消費される「一日だけのベストセラー」と位置づけ、新聞が「想像の共同体」に寄与していることに触れる。同じ国語を前提として毎日の新聞に連載される新聞小説は、新聞の連続性と文学の共時性とは分かちがたく結びついた地点で成立している。新聞小説とはまさに「想像の共同体」を体现するような存在でもある。

アンダーソンの論を近代日本のナショナルリズムの問題に接続して、日露戦後の新聞小説が大文字の「文学」の成立に關与したと論じるのが小森陽一である。小森によれば、新聞が戦争報道にかかわる「商品」として新聞連載小説Ⅱ「文学」を発見し、その発見が近代日本の文学を大文字の「文学」にしたという。「新聞という活字メディアが、国民の大多数に読まれるようになり、言語商品の生産、

販売、流通、消費の回路が、国民経済の中における一つの市場システムとして形成され、新聞連載小説を中心とした「文学」が、毎日毎日享受される習慣が確立し、その言葉による表象の中で、近代国民国家における国民としての共同体が、想像的に確認されていく」<sup>(3)</sup>というのだ。「想像の共同体」と漱石とは不可分に結びついている。一九一〇年代の夏目漱石の新聞小説という視座を想定してみよう。そこからどのようなことが見えてくるだろうか。おそらくそこには、事業としての新聞メディアと、経済活動としての文学とが複雑に絡まり合う場が浮かび上がってくることになるだろう。だが、それは、決して「一つの市場システム」や「文学」という平板なことばでくくれるものではない。その一端を繙いていこう。

## 二、『朝日新聞』の西／東

一九〇六（明治三九）年十二月、大阪朝日新聞社の主筆・鳥居素川は新しい小説家として夏目漱石に白羽の矢を立て、中村不折経由で原稿依頼をした。漱石がこれを断ったため、鳥居は社長の村山龍平に漱石の採用を具申したという。村山は東京朝日新聞社の主筆・池辺三山に漱石との交渉を命じ、池辺は漱石が大朝入社の条件である関西への移住を受け容れるはずがないと考え、東朝への入社として交渉する。かつての漱石の教え子・白仁三郎（坂元雪鳥）が東京朝日との交渉役として両者間を往復することになった。やがて一九〇七年三月末、漱石は年二回ほどの長編連載執筆の条件に対し、月給二〇〇円と年二回の賞与という破格の待遇で漱石は東朝入社を果たした<sup>(4)</sup>。漱石の「人気」と、元帝国大学講師という「社会的名望」とは、実業向けの傾向が強かった『東京朝日新聞』が学生や高等教

育を受けた知識人を読者として取りこむための看板として必要だったようである。<sup>⑤</sup>

『朝日新聞』は一八七九（明治一二）年、大阪で小新聞として創刊され、やがて実業的な性格を強め、正確、豊富な経済情報、政治情報を重視するようになった。『朝日新聞』は日々の娯楽とともに、経済活動上の利益に直結する情報を求める新興の中小商人を中心にひろく受け入れられたようである。また、一八八〇年代には大新聞のように政論や言論を取り入れた紙面作りを行い、政治に興味をもつ地方の有産階級をとりこもうと試みてもいる。こうした情報の雑多性は経営中心に発展を遂げた大阪の新聞ならではのものだっただろう。仮名垣魯文の『仮名読新聞』や高島藍泉の『東京絵入新聞』など、東京の小新聞は戯作者によって作られていた。だが、大阪では近世以来の戯作者の影響力が弱く、東京のように記者、編集中心にはならなかったという。<sup>⑥</sup>そのため、読者のニーズを重視し、さまざまな情報を総合した新聞ができあがったのである。さらにいえば、『朝日新聞』は政論や言論の発信源になるのではなく、それらを流通させる媒介になることを選んだともいえる。それは、明治前期の大新聞とも、その後の独立新聞とも違う、新しい新聞の始まりを意味した。『朝日新聞』は報道に重点を置いて成功した最初の新聞だったのである。

朝日新聞社は一八八六（明治一九）年に東京支局を開設、一八八八年には『めさまし新聞』を買収し、『東京朝日新聞』を創刊する。同時に、『朝日新聞』は『大阪朝日新聞』と改名し、西／東の二つの『朝日新聞』が出現することになる。大日本帝国憲法発布、帝国議会開始をひかえた時期に、東京発信の政治情報をいち早く報道す

る計画だったのであろう。『大阪朝日新聞』が電信を利用して、大阪紙のなかで最初に大日本帝国憲法の全文を掲載したという逸話は、東西朝日新聞社がいかに報道活動を重要視していたかを雄弁に物語っている。<sup>⑦</sup>東西『朝日新聞』は、従来の二五倍の印刷能力をもつマリノニ輪転機の導入（一八九〇年東京社、翌九一年大阪社）、専売店網の拡大（一八九〇年代前半）などを矢継ぎ早に行う。遠隔地からの情報伝達の高速化、新聞を大量に複製する印刷の高速化、多数の購読者に配布する流通の高速化。それらの高速化が鮮度の高い情報を発信し続けることを可能にしたのだといえる。<sup>⑧</sup>

加えて、日清戦争（一八九四～五年）から日露戦争（一九〇四～五年）までの一連の対外侵略が事業拡大を促した。報道活動への傾斜と販売活動の合理化が次々と進み、事業としての新聞事業、商品としての新聞の側面が強められていく。戦争は新聞にとっては激烈な企業競争の場であると同時に、巨大なビジネスチャンスでもあった。戦争時の販売競争は、利益重視と報道中心のスタンスを各新聞社に徹底させることになっただろう。それは、情報を消費物に、読者を消費者にすることだといえる。いわば、新聞の商品化は読者が消費者になる過程と不可分なのである。経済活動としての新聞事業は、新しい読者、新しい市場を求めて拡大を欲望することになる。ここに日露戦争後の経済活動の全体化、統合化の動向が重ねられるのである。

日露戦争後、戦中の好況の反動で経済全般が沈滞に陥った。一九〇六（明治三九）年には大日本麦酒株式会社、大日本製糖株式会社など、三井や三菱などの財閥主導で、さまざまな分野での事業の大规模な再編が行われた。<sup>⑨</sup>近代的な資本主義の装いのもとに、経済の

拡大と統一が開始されるのが明治末なのである。新聞事業も同時期の経済動向と無関係ではいられなかったはずだ。鉄道の国有化（一九〇六年）、中央線（一九一一年）、山陰線（一九一二年）の開通などにより交通網が整備され、鉄道での輸送がより簡単かつ迅速に行えるようになったことも、新聞事業の拡大を強く後押ししたといえる。ここに、新聞事業の東西市場での展開が始まるのである。

朝日新聞社は『東京朝日新聞』を発刊し、それまでになかった強引な販売方法の導入で、いち早く東京市場に参入していた。『東京朝日』は一九〇〇年代には関東市場で中堅の位置を獲得していたが、大阪朝日の後援なしに東朝単独で熾烈な競争を継続することはできなかった。物量作戦的な販売に巨額の資金を投入していた東京朝日社の収支は赤字続きで、その赤字を大阪朝日社に補填してもらっていたという。しかし、日露戦後になると、経営状態も比較的安定し、東京市場での競争力もようやく高まってきたようだ。内容面では報道重視の方針を堅持しつつ、言論活動にも力を入れ、没落しつつあった『日本』や『万朝報』、『平民新聞』などの知識人読者を吸収していった。<sup>10</sup>東西『朝日新聞』が本格的に個別で市場展開を行えるようになったのはこの時期からだったといえよう。

また、同時期には東西市場での同時展開を本格的に開始する新聞が他にも登場してきた。『時事新報』、『大阪毎日新聞』がそれである。『時事新報』は一九〇五（明治三八）年、『大阪時事新報』を発刊して、関西市場に進出し、東西市場展開を目指した。また、『大阪毎日新聞』も一九〇六（明治三九）年に電報新聞社を合併して、『毎日電報新聞』を発刊する。さらに、一九一一（明治四四）年には東京日日新聞社を買収して、紙名を『東京日日新聞』に改め、本

格的に関東での市場開拓に乗り出すことになる。

こうした新聞事業の拡大に伴って、新聞小説にも東西同時掲載の方針が打ち出されることになる。小説の東西同時掲載という事態は、一九一〇年代前後の新聞事業の動向と大きく関わっている。いってみれば、漱石の作品の同時掲載は、単に小説欄のなかだけの問題ではない。新聞小説の歴史のなかに漱石を定位しなおす必要がここにあるといえる。

### 三、同時性の起源

新聞小説は新聞の歴史と強く結びついている。野崎左文は「小新聞は中流以下の階級を讀者とするから、その人々の好みに投ずるよう、何か目先の変わったものを掲げていわゆる呼び物となすが営業上の秘訣であった」という。<sup>11</sup>その呼び物が新聞小説の源流だといえる。新聞の草創期、小新聞紙上にニュースを潤色した雑報記事が掲載され、これが連載されるようになり、続き物へと発展する。毒婦ものを代表とする犯罪関係の続き物は、やがて市井の人々の日常や幕末志士の活躍、華族のお家騒動などを描く、娯楽色の強い読みものに変わっていく。新聞社でも、前もって版画を作り置きできる続き物を読者の読み物として多用することになったといえる。続き物が普及していくと、読者も習慣的にこれらに親しむことになる。『読売新聞』に関わった坪内逍遙は、そうした続き物に近代小説の芸術概念を接続し、新聞小説という考え方を提示する。逍遙の構想は一八八六（明治一九）年、『読売新聞』に掲載された「鍛鉄場の主人」で実現されたといわれる。それまで他の記事と同一に扱われていた続き物の形式ではなく、独立した欄をもつ新聞小説の形式がこのとき

初めて定着したからである。小説は一定の期間、読者をひきつけるとともに、他紙との差異化を図るのにも有効だった。

一八九〇年代以降、新聞小説の掲載が本格化されるようになる。

これは近代日本文学の動向とも関わっているといえる。生方敏郎は「国会が開けてから——委しく言えば例の品川弥次郎大臣のクウデタア以後に現れた文学は、経国文章主義に依る文学ではなく成った。文学は遊戯に成り芸に成り、青少年へのお伽話と成った」と述べる。品川弥二郎の「クウデタア」とは一八九二（明治二五）年の選挙干渉と引責辞職、その後の国民協会組織などを指すようだ。この事件以後、藩閥政府と民党は提携状態に入り、政治運動が徐々に日常のなかから隔離され、政治は文化の背後に沈潜していくのである。この時期、硯友社の活動などがはじまり、文学も政治言論から分離されていった。新聞界でも政論新聞が没落し、独立新聞が登場する時期にあたっている。商品化された新聞紙上でも小説が多様な展開をみせはじめる。主なものを挙げれば、『読売新聞』の紅葉と紅葉門下の作品、『都新聞』、『万朝報』の黒岩涙香らの翻訳もの、『国民新聞』の徳富蘆花の作品、『報知新聞』の村井弦斎の家庭小説、『東京日日新聞』の塚原涉柿園の歴史小説、『毎日新聞』の木下尚江の作品などがある。<sup>13)</sup>

ただ、『時事新報』など、小説掲載にあまり重きを置いていない新聞もある。『時事新報』は一八八二（明治一五）年に福沢諭吉によって創刊された。政論紙化した大新聞の没落とは対照的に、『時事新報』は独自の言論活動と経済情報の豊富さによって独立新聞として成功した。その背景には慶應義塾出身者の強力なネットワークがすでに実業界に存在していたことが考えられる。『時事新報』は

広告の推奨など、新聞経営を経済活動として考えるという契機をもたらした最初の新聞だった。経済の重視は相対的に小説などの軽視につながったようだ。『大阪時事新報』発刊後にもその路線をことさら変更してはいない。『時事新報』系列が継続的に東西同時掲載を開始するのは一九一〇年代後半で、同時期に東西市場での展開を開始した『大阪朝日』、『大阪毎日』系列にやや遅れている。<sup>14)</sup>

同じ独立新聞でもそれとは異なり、『朝日新聞』は続き物の掲載に意欲的だったようだ。創刊当初は東京などの戯作者による寄稿が主だったが、やがて宇田川文海が入社し、一八八五（明治一七）年頃から文海、岡野半牧らを中心に、続き物の体裁が整ってくる。その後、退社した文海にかわって、宮崎三昧、渡辺霞亭、加藤紫芳、西村天囚、本吉欠伸、須藤南翠、中川重麗、半井桃水、村上浪六、河野雀甫などが『読売』で確立された形式を取りいれ、一八九〇年代に『朝日』の新聞小説を軌道に乗せた。初期には連載作品をそのまま舞台にかける企画なども行われており、大阪における新聞小説の定着はそうした『大阪朝日』の工夫に依るところも大きい。一方、『東京朝日新聞』は当初から連載小説二本の並行掲載の体裁がとられている。『大朝』にも見える文海、霞亭、桃水、三昧、浪六のほか、小宮山天香、饗庭篁村、幸堂得知、三品蘭溪、嵯峨の屋主人、原抱一、武田仰天子などの執筆者の名を挙げることができる。東西『朝日』の新聞小説は華々しさには欠けるが、読者の読み物としては安定した供給が行われていたといえる。ただ、一九〇〇年代後半にはその安定性はマンネリと受け止められることにもなる。<sup>15)</sup> 美文調の衰退と言文一致の完成、硯友社の後退と自然主義文学の勃興、教育制度の浸透による中間インテリ読者層の増加など、旧来の読み物



では読者のニーズに対応しきれなくなっていた。

この時期、日露戦後の不況下で改革を迫られていた『東京朝日』は、戦時経費の赤字解消と戦後拡大した市場での事業展開のために、紙面全体の近代化が必要されていた。一九〇四（明治三七）年には須藤南翠や小宮山天香らの古株の社員が大量整理された。ロンドン、上海などとの通信網の充実、探訪員制度の廃止などの社内整備もこの時期に行われた。一九〇七年には浜川玄耳が社会部長に迎えられ、社会面の改革を行った。社会部の担当であった新聞小説に関する刷新も進められていく。すでに一九〇四年には大朝が、一九〇六年には東朝が初めて懸賞小説を募集し、新人作家の発掘を行っていた。二葉亭四迷の大朝入社も一九〇四年のことであった。漱石入社はこうした改革の一環であったといえる。

一九〇七年六月二三日から「虞美人草」の連載が始まる。以下、漱石の作品のほぼすべてが東西『朝日新聞』に発表された。短編や小品、随筆を含めてもそれほど多くないが、約一〇年間、同一作家の作品が継続的に東西の『朝日新聞』に掲載された例はない。東西『朝日』では唯一漱石の作品だけが東西同時掲載された。その経緯は詳らかにはわからないが、大朝側から東西同時掲載の要望があったと考えられる。もっとも早く漱石の招聘を企図した鳥居素川の意向もあり、入社後しばらく漱石の作品は『大阪朝日』を優先して執筆されている。莫大な漱石の給料を大阪朝日側が補填していたともいう。ともあれ、漱石をめぐる東西朝日の動向が、漱石の作品の同時掲載の方針につながっていったようである。これはある意味で意図せざるかたちでの決定であり、漱石の作品が東西同時掲載の発表形態をとることになったのは偶然といつてよい。しかし、この偶然

の方針はやがて、経営戦略として必然化されていくことになる。

漱石の作品の同時掲載は、他紙との差別化と東西『朝日新聞』の一体感の保持を意図していたといえるだろう。この時期、特に活発になった報道活動の促進は国家という枠組みのなかでの情報の共有を促進させる。だが、新聞の販売競争では一度共有された情報には価値はない。販売競争とは商品としての新聞を購入させるためのものであり、情報の一回性こそが重要だからである。それゆえ、新聞はつねに差別化を必要とすることになる。一九一〇年代、地方版や夕刊が出す新聞が増えるのも、独自性を打ち出し、差別化を行うための経営戦略であった。新聞小説は、こうした差別化の経営戦略の一部を担っていたといえよう。小説は他紙との差別化を行い、なおかつ新聞の自己同一性を確認する手段となりうる。このときにこそ、新聞小説は「想像の共同体」との関わりにおいて「文学」となる契機をもつ。東西同時掲載という漱石の特殊性が問題なのは、この点にあるのである。

#### 四、競争のダイナミズム

夏目漱石の特殊性は東西同時掲載という点にある、ということは繰り返し述べている。それは東西『朝日新聞』だけでなく、他の新聞にも影響を及ぼしたといえる。おそらく、『大阪毎日新聞』とその系列の関東紙はもっとも強くその影響をうけた新聞であろう。

『大阪毎日』は、経営不振に陥った大新聞の『大阪日報』と小新聞の『浪華新聞』が統合され、一八八八（明治二一）年に発刊された。その翌年、渡辺台水が社長として就任すると、小説掲載が本格的に開始され、一八九〇年代には宇田川文海、井上笠園、菊池幽芳

などが活躍した。一九〇〇年代になると『大阪朝日』との販売競争をくり広げるなか、家庭小説というジャンルの形成に大きな役割を果たした菊池幽芳の存在が大きくなる。『大阪毎日』の社会部の記者であった幽芳は、文学欄を創設して、「品性を涵養せよ高尚なる思想を蓄へよ」と訴えた。幽芳は「野卑の趣味より高尚の嗜好」への移行によって、趣味の教育や啓蒙などを企図したのである。<sup>⑧</sup>広津柳浪、泉鏡花、小杉天外、小栗風葉など、東京の作家の作品を積極的に『大阪毎日』紙上に掲載し、後藤宙外を客員として文学欄に迎えたのも幽芳である。一九〇〇（明治三三）年には自ら「己が罪」の連載を開始し、家庭教育の理念を取り込んで新聞小説に新局面をもたらした。<sup>⑨</sup>そうした新しい新聞小説路線の開始は、その後『大阪朝日』との差別化を図り、関西での販売競争に打ち勝とうとする企図をうかがうことができる。幽芳は文学欄創設に際して、関西における文学の勢力を『大朝』と『大毎』の二紙に限定して論じ、自社の新しさを主張しているのだが、これは『大阪朝日』への強烈な対抗意識と差別化のマニフェストであったといえよう。家庭小説掲載の方針は日露戦争をはさんで一九一〇年代以降も脈々と続いていき、後に菊池寛の『真珠夫人』へと結実することになる。

一九〇六（明治三九）年二月二日、毎日電報社を合併し、『毎日電報新聞』を発刊するが、しばらく東西同時掲載の作品はない。『大阪毎日』系列で初めて東西同時掲載が行われるのは一九〇七年六月九日に連載が始まった塚原洪柿園の「石川五右衛門」以降である。この背景にも『大阪朝日』への対抗意識があったようだ。漱石の入社の挨拶ともいえる「京に着ける夕」が『大朝』紙上に掲載されたのが四月九日から一一日、続いて「入社の際」、「文芸の哲

学的基礎」が掲載され、五月二八日には「虞美人草」の予告が出る。<sup>⑩</sup>『大阪毎日』では連載中の桃川如燕口述「西郷隆盛後伝」を一時終了して、洪柿園の「石川五右衛門」の連載を開始するという予告を五月二四日に出していた。その連載開始日は漱石の「虞美人草」<sup>⑪</sup>掲載に先立つこと二週間である。これは単なる偶然ではなく、『朝日』系列に先んじようとする『大毎』系列の試みだったと考えられる。漱石入社と大阪、東京にまたがる作品の掲載を見た大毎社が東西『朝日』に遅れじと洪柿園の作品の東西同時掲載に踏み切ったのであろう。両『朝日』もそうした『大毎』の対応を見て、漱石の作品の掲載を急いだのではないだろうか。

塚原洪柿園は心理描写を取り入れた歴史小説の開拓者として知られ、元東京日日新聞社記者だが、毎日電報社設立時に請われて入社したという。<sup>⑫</sup>洪柿園はこの年の六月下旬の西園寺公望の文士招待会にも招待され、当時の一流作家と認められていたといえる。なお、漱石と二葉亭も招待されていたが、兩人とも招待を断り、両『朝日』は他の出席者のインタビューなどで急場を凌いだ、社としての面目は丸つぶれであったはずだ。一般の読者からすれば、招待を断る変わり者の作家より、招待会に出席し、華々しく脚光を浴びている作家の方を好ましく思うのは当然だろう。

ただし、洪柿園の路線は成功したとはいえない難いようだ。以降、『大毎』系列では洪柿園「家康公」、小栗風葉「春潮」、洪柿園「疑ひ」、田口掬汀「猛火」などがほぼ継続的に東西同時掲載されている。<sup>⑬</sup>この時期、風葉は「青春」、掬汀は「伯爵夫人」など代表作を物し、現代ものの人気作家であった。洪柿園の「疑ひ」<sup>⑭</sup>は得意の歴史小説ではなく、現代ものであった。歴史小説の泰斗・洪柿園をし

て現代ものを書かしなければならなかったというのはただごとではない。それほどに読者に受け入れられなかったということであろうか。ともあれ、渋柿園の新しい歴史小説路線は従来の講談速記に戻され、現代もの、家庭小説の路線が重要視されていたのである。

一九一（明治四四）年三月、『毎日電報新聞』は東京日日新聞社の合併で『東京日日新聞』に改名される。東日との合併から一九一〇年代前半までに東西同時掲載された新聞小説は、菊池幽芳「百合子」、柳川春葉「かたおもひ」、幽芳「小ゆき」、春葉「うき世」、幽芳「毒草」などが挙げられる。渋柿園の名が消え、幽芳、春葉の名が交互に挙がっている。一九一〇年代前後、『東京日日新聞』は春葉の家庭小説を積極的に掲載していたが、合併後もそうした路線が継続されたであろう。また、幽芳が二年間の渡欧から帰国したことも家庭小説の路線に大きく影響したといえよう。

『大阪毎日』系列の東西掲載の方針が決定されるのは一九一〇年代後半のことだ。この時期には、家庭小説路線の継続に加えて、森鷗外の歴史小説、史伝ものが登場している。初めの頃の「渋江抽斎」、「壽阿彌の手紙」、「伊沢蘭軒」などでは多少の東西での掲載日の違いが見られるが、以降の「鈴木藤吉郎」、「細木香以」、「小島宝素」、「北条霞亭」などではそうした違いが減っていく。<sup>28</sup>東西での小説掲載の方針が完全に一致したのがこの時期だったのだといえる。鷗外の作品の採用に、東西『朝日新聞』の漱石に対抗する『大毎』の思惑があったことは周知だろう。一人の有名作家が同時掲載の主柱を担うというのは、まさに東西『朝日』での漱石の役割だったからである。『大阪毎日』は東西『朝日』に対抗する意味で鷗外の名を戦略として使用しようとしたのである。

また、鷗外の採用には、かつての渋柿園の歴史小説の路線の復活という意図もあっただろう。講談速記から新しい歴史小説への移行がここでは試されたといえる。一九一五（大正四）年に『大阪毎日』が夕刊を発行することになると、講談速記は夕刊に掲載されるようになった。これは従来の読者に夕刊を浸透させるためのアイディアであったと考えられる。鷗外の作品は朝刊に掲載されており、講談速記とは区別されていた。つまり、鷗外の歴史小説は、従来の講談速記の読者とは異なった新しい読者の牽引を期待されていたといえる。しかし、多くの英雄が登場し、ドラマティックに展開されていく講談速記と、市井の人物の日常に肅々とせまっていく鷗外の歴史小説ではあまりにも対照的だ。鷗外の歴史小説や史伝は一般の新聞読者には不向きだったようだ。<sup>29</sup>その点で鷗外採用は失敗だったといえる。一九一七（大正六）年、鷗外の名は『大毎』系列から消える。それ以後、『大阪毎日』系列での新聞小説の東西同時掲載は、不特定多数の作家による現代小説路線がとられることになる。菊池寛の「真珠夫人」はこの路線上に登場することになる。<sup>30</sup>

東西『朝日』と『大毎』系列の新聞は、東西同時掲載を競い合った。一人の作家を長く登用した東西『朝日』に対し、家庭小説と歴史小説という二つの路線を継続した『大毎』。両者の動向こそが東西に分かれた近代日本に一つの小説言説が流通していく契機になったのだといえよう。このとき初めて「近代国民国家における国民の共同体」と「文学」のつながりが見えてくる。漱石はそのつながりの原点を象徴する作家だといえよう。



## 五、新聞小説の西／東

「彼岸過迄に就て」のなかで漱石は、「東京大阪を通じて計算すると、吾朝日新聞の購読者は実に何十万といふ多数に上つてゐる」と書いている。「東京大阪を通じて」という漱石のことばの背景には漱石の特殊性が潜んでいる。漱石は当時の東西『朝日新聞』の新聞小説家の中で唯一「東京大阪を通じて」読むことのできた作家であった。その事実が、漱石に「何十万」の不可視の読者たちを想像させることを可能にしたのである。雑誌には限定された読者が存在するだろうが、一九一〇年代にはまだ雑誌読者をマスとして想像することはできない。それに対して、新聞は毎日「何十万」という読者に消費される。「彼岸過迄」連載時の東西『朝日新聞』の発行部数は合計で三万部にも及んでいる。まさに新聞は「一日だけのベストセラー」だった。漱石が「東京大阪」の「何十万」という読者たちを想像することができた、数少ない小説家の一人だった。そうした漱石の特殊性は記念されるべきだろう。

ただ、その特殊性には、もう一つの問題が隠されている。それは東西での差異の問題である。小説の東西同時掲載には東西の統合を象徴する意味がこめられていたといえるが、その反面で他紙との差別化のみならず、東西各市場ごとの差異化も図らなければならぬ。東西展開するうえでは、経営の統一とは別に、地域ごとのニーズにあった紙面作りや販売方針が必要だったからだ。東西に分かれた市場において統一と差異化の両面での戦略が東西展開を進める新聞社には必要だった。新聞小説でも、東京には東京の、大阪には大阪の読者の好みがあり、また、新聞社にはそれぞれ抱えの作家

がおり、都合のつく作家の作品を掲載するのが通常の場合だった。読者の違いや社の都合によって東西で異なった小説を掲載するのは、新聞社としてはむしろ当然の措置だった。冒頭に挙げた「手紙」はその東西の差異を如実に示すものであった。

一九一〇年代の東西『朝日新聞』では、漱石以外の作家の作品は誰一人として東西で同時掲載されることはなかった。漱石の死後、東西『朝日新聞』ではしばらく同時掲載の作品は見当たらない。営業的に価値なしと判断されたのか、適当な作家がいなかったのかはわからない。一九二〇年頃になると時々同時掲載が行われるが、基本的には一九二五年頃まで東西別の作品が多数を占める。『大阪毎日』系列が一九一六年以降、ほぼ継続的に東西同時掲載を行っていたのと対照的だ。東西『朝日』への対抗意識から『大毎』はこうした路線を継続したのであろう。

漱石の在籍時に発表された、いわゆる文学的な作品には、二葉亭四迷「其面影」、「平凡」、島崎藤村「春」、森田草平「煤烟」、「自叙伝」、永井荷風「冷笑」、長塚節「土」、徳田秋声「徴」、中村古峡「殻」、中勘助「銀の匙」、高浜虚子の「柿二つ」などが挙げられる。だが、これらはすべて『東京朝日』だけに掲載された作品である。<sup>(29)</sup>

漱石の在社期間に両方の小説欄に名前が見える作家には、渡辺霞亭や半井桃水、大塚楠緒子、森田草平、徳田秋声、正宗白鳥、根本吐芳などがいる。これらの作家もそれぞれ東西の『朝日新聞』に作品が掲載されているが、それらは東西で異なっている。ことに、渡辺霞亭は社会部の記者でありながら、三〇年以上にわたって両『朝日』紙上でもっとも活躍した新聞小説家でもあった。霞亭をはじめとして緑園や碧瑠璃園、黒法師、黒頭巾、春帆楼、朝霞などいくつ

ものペンネームを使い分け、一九二六（大正一五）年に死ぬまでの間に『東朝』に三〇編、『大朝』に二〇二編の作品を、漱石在籍の期間中だけでも『大朝』に二五編、『東朝』に一編の長編小説を発表した。多いときには三編以上の新聞小説を同時に執筆することもあるが、あつた霞亭だが、しかし、東西で作品を同時に掲載されたことは一度もなかった<sup>⑩</sup>。

東西別の小説と東西同時掲載の小説。一九一〇年代以降の読者には二種類の新聞小説が提供されていた。通常の読者には意識されなかっただろうが、西と東の小説のことばの位相の違いはたしかに存在していたはずだ。漱石の特殊性を意識せずに、当時の新聞小説を語るということは、そうした差異を均質化してしまうということになる。漱石の作品に関しても、『朝日新聞』の西／東の差異を意識的に取り上げて考える試みはほとんどない。論文などの注記に東西の区別が行われることさえ少ないのが現状である。ここには新聞を「一つの市場システム」として均質に考える心性が潜在していると思われる。そうした心性は、無意識のうちに近代日本を均質なものとしてとらえ、「想像の共同体」を再生産してしまっているのではないだろうか。

土屋礼子は、大阪資本の新聞社の後援による日本の新聞史が東京紙中心の歴史を語っていることを指摘している<sup>⑪</sup>。さまざまな段階を経て行われた新聞の東西市場展開の歴史が適及的に書かれるとき、そこには均質化の作用が働く。歴史とは現在を目的として物語られるものなのだから。かつてあった西／東の亀裂は隠蔽され、歴史の必然性と均質性が強調される。そのうらはらに排除が存在する。近代日本文学史においても、本来偏差があったことばの位相をあたか

も均質のものとして想定することは「想像の共同体」を補強することにはかならない。そうした均質性は他者を欠いた想像と連関し、起源としての古典を更新し続けるだろう。

特殊性を意識するということは、差異を顕在化させ、他者を露呈させることであるはずだ。他者を語り、差異を認めることばは、過去を語るだけのものではない。それは現代をも語りうることばなのである。

## 注

- (1) 「ケーベル先生」一九一・七・一六〇七『東朝』／七・一八〇九『大朝』、『変な音』一九一・七・一九〇二〇『東朝』／七・二〇〇一『大朝』
- (2) ベネディクト・アンダーソン／白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』（N.T.T出版、一九九七）
- (3) 『世紀末の予言者』（講談社、一九九九）
- (4) 高木健夫『新聞小説史 明治篇』（国書刊行会、一九七四）
- (5) 漱石をめぐる東西『朝日新聞』の企業戦略については、有山輝雄『明治末期の新聞メディアと漱石』（『漱石研究』五）一九九五・一二）などを参照した。
- (6) 土屋礼子『大衆紙の源流 明治期小新聞の研究』（世界思想社、二〇〇一）
- (7) 『朝日新聞の九十年』（朝日新聞社、一九六九）には「この日、大朝社あての打電量は、十一回にわたって計千百三十七音信、この料金百二十一円三十七銭、二月中の東京支局発電報料金のほぼ三五パーセントを占めている」とある。
- (8) 山本武利『新聞と民衆』（紀伊國屋書店、一九七三）
- (9) 隅谷三喜男『明治の歴史22 大日本帝国の試煉』（中央公論社、一九七四）
- (10) 山本・前掲書（注8参照）
- (11) 「明治初期の新聞小説」（『私が見た明治文壇』一九二五）

- (12) 本田康雄『新聞小説の誕生』(平凡社、一九九八)
- (13) 明治三〇年代の新聞小説については、浅井清「ジャーナリズム発展の意味」(『文学』一九八六・八)などに詳しい。
- (14) 一九一五年前後の『時事新報』系列の東西同時掲載作品は、岡本綺堂「鳥籠」(一九一五・九・一六)六・一・一三、外ヶ濱人「春の海」(一九一六・一・一四)七・六、綺堂「絵絹」(一九一六・七・七)一・八、長田幹彦「虚栄」(六・一・九)七・五・八、佐藤紅緑「櫻の家」(七・五・九)一〇・二三、紅緑「路」(七・一〇・二四)八・三・一八、久米正雄「螢草」(八・三・一九)九・二〇)など。
- (15) 『朝日新聞の九十年』(前掲・注7参照)では「いずれも社内作家たちが交代で筆をとっていたが、顔ぶれが同じだけに、ともすれば清新味を欠くくらいを免れなかった」と説明する。
- (16) 江藤淳『漱石とその時代 第四卷』(新潮社、一九九六)
- (17) 「文学欄を設くるの辞(上)」一八九九・一・一五『大阪毎日新聞』
- (18) 奥武則『大衆新聞と国民国家 人気投票・慈善・スキャンダル』(平凡社、二〇〇〇)
- (19) この点に関しては、飯田祐子『彼らの物語——ジェンダーと日本近代文学』(名古屋大学出版会、一九九八)、金子明雄「家庭小説」と読むことの帝国——『己が罪』という問題領域』(『メディア・表象・イデオロギー——明治三十年代の文化研究』(小沢書店、一九九七)、奥武則『大衆新聞と国民国家 人気投票・慈善・スキャンダル』(平凡社、二〇〇〇)、鬼頭七美「紙面の中の『己が罪』」(『日本近代文学』二〇〇六・五)などを参照。また、家庭小説と新聞については、別稿にて詳述したい。
- (20) 「入社辞」五・三『東朝』／五・四『五』『大朝』、「文芸の哲学的基礎」五・四『六』四『東朝』／五・九『六』四『大朝』
- (21) 一九〇七・六・二三／一〇・二八『大朝』／一〇・二九『東朝』
- (22) 『明治文学全集 明治歴史文学集一』(筑摩書房、一九七六)の年譜参照。ただ、『毎日新聞七十年』(毎日新聞社、一九五二)には「毎日電報に、その前身電報新聞時代からひきつゞき在社」とある。
- (23) 各作品の掲載年月日は、「石川五右衛門」(一九〇七・六・九)一・一一、「家康公」(一九〇八・五・一二)一〇・五、「春潮」(一九〇八・一〇・六)二・二六、「疑心」(一九一〇・四・二五)七・一四、「猛火」(一九〇九・一・一)四・二九
- (24) 風葉は「白無垢鉄火」(一九〇二・一・一)三・一五、「麗子夫人」(一九〇五・一・一六)六・三・一四、掬汀は「新生涯」(一九〇三・一二・二八)四・三・一〇)を掲載した。なお、風葉の「青春」は『読売新聞』一九〇五年九月から一月まで、掬汀の「伯爵夫人」は『万朝報』一九〇五年四月から一月まで連載された。
- (25) 各作品の掲載年月日は、「百合子」(一九一三・四・二五)一・一二、「かたおもひ」(一九一三・一・二三)四・一〇・二六、「小ゆき」(一九一四・一〇・二七)五・七・一五、「うき世」(一九一五・七・一六)六・四・一五、「毒草」(一九一六・七・一四)七・二・一〇)
- (26) 各掲載年月日は、「洪江抽斎」(一九一六・一・一三)五・一七『大毎』／二〇『東日』、「壽阿彌の手紙」(一九一六・五・一八『大毎』／五・二二『東日』／六・二四、「伊沢蘭軒」(一九一六・六・二五)七・九・四『大毎』／五『東日』、「鈴木藤吉郎」(一九一七・九・六)一八、「細木香以」(一九一七・九・一九)一〇・一三、「小島宝素」(同一〇・一六)二八、「北条霞亭」(一九一七・一〇・二九)二・二六
- (27) 高木・前掲書(注4参照)
- (28) 『時事新報』系列及び『大阪毎日新聞』系列の新聞小説については、高木前掲書(注4参照)、『毎日新聞七十年』(前掲・注22参照)などを参照した。
- (29) 各作品の掲載年月日は、「其面影」(一九〇六・一〇・一〇)二・三、「平凡」(一九〇七・一〇・三〇)二・三二、「春」(一九〇八・四・七)八・一九、「煤烟」(一九〇九・一・一)五・一六、「冷笑」(一九〇九・一二・一三)一〇・二二八、「土」(一九一〇・六・一三)一・一七、「自叙伝」(一九一・四・二七)七・三二、「微」(一九一・八・一)一・三、「殻」(一九一二・七・二六)一・二五、「銀の匙」(一九一三・四・八)六・四、「柿」(一九一五・一・一)四・一六
- (30) 高木・前掲書(注4参照)。買収前「めさまし新聞」に在籍していた霞亭は、そのまま東京朝日社に入社し、後に社長村山龍平に認めら

れ、大阪朝日に移籍し、一八九〇年以來『大阪朝日』の新聞小説の中心作家として主に歴史小説を物した。多くの筆名を用い、東西『朝日』だけでなく、『東京日日』、『日本』、『報知』、『三六新報』、『読売』、『名古屋』など新聞、雑誌にも多くの作品を執筆した。たとえば、『東朝』で「中山大納言」(一九一五・四・二二〜八・二四)を、『大朝』で「実録仙台萩」(一九一四・九・二一〜五・八・八)と「楠正成」(一九一五・八・九〜二二・三一)を並行して連載している。

(31) 土屋・前掲書(注6参照)